

イザヤ書64章4節 「今まで見たことのないもの」

1A 神の聖さについて

1B 戒めの聖さ

2B ご臨在の聖さ

2A 人の罪深さについて

1B 不潔の着物のような義

2B 全的墮落

3B 生まれながらの罪

3A 神の愛について

1B 一方的な憐れみ

2B 諦めない愛

3B 反抗する者への愛

本文

私たちのイザヤ書の学びはついに、最後を迎えます。午後礼拝に、64章から66章までを読みます。今朝は64章4節に注目したいと思います。「**神を待ち望む者のために、このようにしてくださる神は、あなた以外にとこしえから聞いたこともなく、耳にしたこともなく、目で見ただ事ありません。**」主が今、天から下ってきてくださり、地上で国々に攻められているイスラエルを救いに来てください。その残りの民が、その光景を見て、このようなことをしてくださる神は、聞いたこともなく、目にしたこともない、と言っています。

パウロは、ここの箇所を取り上げて、コリント第一2章において神の知恵について論じています。「1コリント 2:7-9 私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「**目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。**」

多くの人が、神を知りたいと願っています。けれども、なかなかこの方を知ることができません。今でも目に浮かぶのが、私の母の姿ですが、私が目に見えない神は確かにおられることを伝えるのですが、目をつぶって、一生懸命、頭の中で思い描こうとしているのです。踏ん張るようにして神を心の中に見ようとするのですが、見つけることができません。多くの人に、「自分が信じる力、その信心深さで神を知れるようなものではないですよ。」と教えます。ここの箇所を見てください、目で見ただ事がないもの、耳で聞いたことがないもの、そして人の心に思い浮かんだことがないもの

のを、神は用意しておられると言っています。ですから、これまでの経験や知識が、一切通用しないところに神の知識があります。

多くの人が、「神のことは理解できないから、私は信じません。」と言いますが、私はもし自分で神を把握できるのであれば、そんな神は信じたくないと思います。なんで、自分で理解できるほど小さな神を信じる必要があるのでしょうか。自分の理解をはるかに超えるからこそ、信じるに値する方ですね。「天が地よりも高いように、わたしの道はあなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。(イザヤ 55:9)」と主は言われました。もし神を知ることができるのであれば、それは自分の思いを超えたところにある知識によって知ることができます。自分の感じていることを超えたところにある感覚で知ることができます。実に、神の霊、御霊によって知ることができることを聖書は教えています。

1A 神の聖さについて

目で見たことのないこと、耳で聞いたことのないこととして、神の聖さ、あるいは正しさがあります。私たちは、絶えず自分の感覚や理性、直観で正しさを推し量っています。その中で生きていれば、ある程度満足しています。それから落ちていると、良心が痛み、心が痛みます。申し訳ない気持ちになります。けれども、私たちは独りで生きているわけではありません。自分が生きて、存在しているのは神によります。天地を造られた方が、今も自分の命と息を支えておられます。そしてその方が見ておられる基準と、自分が自分を見る基準には大きな開きがあります。

1B 戒めの聖さ

その神が、どれだけ聖なる方かを教えているのは、神がモーセを通してイスラエルに与えられた十戒です。「3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。・7 あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。・20:8 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。・12 あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。13 殺してはならない。14 姦淫してはならない。15 盗んではならない。16 あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。17 あなたの隣人の家を欲しがってはならない。」

このように主が語られた後に、イスラエルの民は雷と、いなずま、角笛の音と、煙る山を目撃しました。彼らは恐ろしくなり、そこから離れ、そしてモーセに対して、「どうか、私たちに話してください。(19 節)」と言いました。なぜなら、神がそのまま彼らに直接語られると、自分が滅びてしまうのではないかと思ったからです。主なる神が語られたことは、それだけ聖く、近寄りがたいものだったのです。

けれども、これらの戒めを聞いて、それでも自分で守られていたと思っていた、とても真面目な青年がいました。彼はイエス様に近づきました。そして、永遠の命を得るにはどうすればよいか尋ね

ました。イエス様は、「戒めはあなたもよく知っているはずです。『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。欺き取ってはならない。父と母を敬え。』」（マルコ 10:19）」と言われましたが、なんと「先生。私はそのようなことをみな、小さい時から守っております。（20 節）」と言いました。凄いですね、なんと品行方正な人でしょうか。そこで、イエス様は彼を慈しんで言われました。「あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。（10:21）」けれども彼は悲しい顔つきになって、立ち去りました。なぜなら、多くの財産を持っていたからです。財産の中に、彼は自分の命を置いていました。財産が心の拠り所、これがあるから自分があるということでした。ですから、イエス様にそのことを語られた時に、まるで自分を失うかのように感じたのでしょうか。自分にはできないことを悟って、悲しくなったのです。

けれども、イエス様は彼にできないことを命じられたのではありません。彼がしがみついているものを、捨てなさい、ただ手放しなさい、そして神を知りなさいと言われただけなのです。イエス様は、第一の戒めを語っておられたのです。「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。」彼は、神の前に財産というものを神にしていたのです。このように神の戒めがあり、私たちが聞いたことがないような形で、神の聖さを教えてくれます。

2B ご臨在の聖さ

私たちが神の聖さを知ることによって、初めて信仰を持つことができます。多くの人が、「神は信じているけれども、イエスが自分にとってどれほどの人なのかが分からない。」と言います。聖書にも、そんな人の一人にペテロがいました。ペテロは、漁師でした。一晩中、ガリラヤ湖で網を降ろして漁をしていましたが、一匹もとれませんでした。イエス様は次の日に、ペテロの小舟に乗ってそこから神の言葉を語られました。そして、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい。」と言われました。ペテロは、「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましよう。（ルカ 5:5）」と言いました。すると、たくさんの魚が入り、網が破れそうになり、仲間の者たちに来てもらって、別の舟といっしょに網を運び、岸にまで行きました。

そして、こうあります。「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と言った。（5:8）」ペテロにとって、漁は誇りでした。彼はこのことにかけてはプロですが、全く自分ではとれなかったのに、イエス様の一言でこんな大漁だったのです。彼の内で、自分で生きている、自分がやればなんとかできるのだという自負が崩れ去りました。そして、罪深い人間だと言っています。イエス様に神の聖さを感じたのです。自分は、これまで「先生」とイエス様を呼んでいました。尊敬はしていたけれども、ユダヤ教の教師としての存在でした。しかし、自分の生活、自分のあり方そのものを、全て牛耳っておられる「主」ご自身であることを知ったのです。

2A 人の罪深さについて

このように、聖なる神に出会うと私たちは、これまで心に浮かんだこともないことが起こります。それは、「自分の罪深さ」を知るのです。

1B 不潔の着物のような義

本文を少し読み進めると、イスラエルの残りの民がこのように祈っているのを見ます。「私たちはみな汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。(64:6)」主が聖い姿で降りてきてくださったので、自分たちの汚れが見えてきたのです。ここで自分が正しいと思って行っていたこと、自分の最善を尽くしていたこと、これらが神の前では不潔な着物のようであったと嘆き、絶望している姿です。女性の皆さんには申し訳ないですが、ここは直訳で「月の物で汚れたようです。」となります。神の律法において、女が月のもので儀式的に、象徴的に不浄になることが書かれています。神の前でそうなってしまうと嘆いているのです。

2B 全的墮落

これは、自分が何か悪いことをしたという行為の話ではありません。自分がどんなに正しいと思っていることをしたところで、動機やその意図が不純であり、そこから免れることはできないほど墮落しているということです。このことを、イスラエルの民がありったけの表現を使って言い表している祈りがあります。以前読んだことのある、59章3節以降です。「59:3-7 実に、あなたがたの手は血で汚れ、指は咎で汚れ、あなたがたのくちびるは偽りを語り、舌は不正をつぶやく。正しい訴えをする者はなく、真実をもって弁護する者もなく、むなしいことにたより、うそを言い、害毒をはらみ、悪意を産む。彼らはまむしの卵をかえし、くもの巣を織る。その卵を食べる者は死に、卵をつぶすと、毒蛇がとび出す。そのくもの巣は着物にはならず、自分の作ったもので身をおおうこともできない。彼らのわざは不義のわざ、彼らの手のなすことは、ただ暴虐。彼らの足は悪に走り、罪のない者の血を流すのに速い。彼らの思いは不義の思い。破壊と破滅が彼らの大路にある。」どうですか、口が災いの元と良く言われますが、本当に毒に満ちていますね。そして動かしている手が毒を持っています。そして足は人の血を流しています。ここまで、自分が悪に満ちているとは、思いつきもしなかったでしょう。けれども、事実そうなのです。頭から足の先まで、罪まみれであることを聖書は教えています。

3B 生まれながらの罪

普段は、このことが分からないかもしれません。それはあたかも、泥が下に沈んでいるコップの中の水のようなのです。何かの刺激が与えられたら、全体が泥水になってしまいます。普段は透明なので、自分がそこまで汚れているとは思えないのです。ダビデがそんな人でした。彼は本当に、主を愛して生きていました。ところが夕暮れに起きて、屋上を歩いていると、身を洗っている女が見えました。そしてその女と寝て、女が妊娠しました。さらにダビデは、その女の夫ウリヤを殺しました。このことを全て行なった後に、友人ナタンに罪を指摘されて、激しい罪の自覚が与えられました。今まで、こんなに自分が罪深いとは思っていなかったのです。けれども、彼はこう祈ったのです。「あ

あ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。(詩篇 51:5) 生まれながらにして、何と母の胎にいる時から罪ある者であるという自覚が与えられました。

3A 神の愛について

このように、自分が罪深い、罪の性質をもって生まれてきて、罪だけの自分なのだという悟りは、これまで聞いたこともないでしょうし、見たことも、心に浮かんだこともないでしょう。そして次が、最もありえない話をします。それは天地を造られ、聖なる方が、汚れたまま、そのままの貴方を愛しておられる、ということです。

1B 一方的な憐れみ

神が人を愛するとは、それはその人に愛されるべきものがあるから、愛するのではないということを知る必要があります。「神は愛です。」とヨハネ第一の手紙に書いてあります。神は愛を持っているのではなく、神は本質からして愛なのです。ちょうど金太郎飴において、どこを切っても金太郎が出てくるように、神は何をしても、どんな時であっても、愛ではないものから何かを行われないということであります。主がイスラエルの民に、こう言われました。「申命 7:7-8 主があなたがたを恋慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。」ヤコブの数が多かったからではなく、むしろ数が少なかったから愛されたというのです。どうでしょうか、私たちは愛されるべきものがその対象にあるから、愛します。しかし、神はそれが無いのに、愛します。いや、愛されるべきものが人間側にはないその対象を、この上もなく愛されるのです。

どうでしょうか？この真理をもし知れば、人間革命が起こります。どこかの新興宗教はその言葉を使っていますが、人間をいじくったところで革命は起こりません！神の無条件の愛に触れる時に、その時に心の奥底からの大変革が起こるのです。

2B 諦めない愛

そして私たちの神の愛は、あきらめることがありません。これが凄いです。今、イザヤ書を学んでいます、次回はエレミヤ書を学びます。そこには、イスラエルが初めの頃から神に背き、その度に懲らしめを受け、ついに約束の地から引き抜かれるところまでいくことが書いてあります。その間、神は何度も何度も、預言者を遣わして、あきらめることなく語りかけられるのです。そして何と、七十年後に彼らを帰らせると言われるのです。実に、神は人が罪を犯して、神から離れた時、その直後から神は、人をご自分のもとに戻らせようとされました。女の子孫の預言を与え、皮の衣を着せて、そしてエデンの園を追放されました。罪があるゆえ、そこから出さなければいけませんでしたが、いつまでも語りかけておられました。

そして終わりの時には、神は御子によって語っておられると言われています。イエス・キリストは、今、この時にあなたのものなのです。この方によってあなたに語られます。私たちは、どこかであきらめます。だから、このことが信じられないのです。しかし、神はあきらめません。いつまでも手を伸ばしています。ここイザヤ書でも、反抗する民にいつまでも手を伸ばしている神の姿が書かれています。主はご自身を母親、いやそれ以上の存在に喩えておられます。「イザヤ 49:15-16a 女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。」

3B 反抗する者への愛

そして神の愛は、ご自身に反抗する者、罪を犯している者に向けられます。「ローマ 5:5-8 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」

神の愛が私たちの心にどのように注がれているのか？それは、まだ弱かった時に、不敬虔な者のために死なれたのです。死んでくださるというだけでも、すごい愛です。私が自分の罪のために死ななければならないのですが、身代わりに死んでくださいました。死ぬだけでも、誰か自分に良くして下さった人のために、身代わりになることがあるいはできるかもしれないけれども、普通はできません。自分の息子のためなら死ねるという母親はいるかもしれせん。では、聞きます。自分の息子を殺した犯人が死刑になりますが、その身代わりに死ねますか？こんな質問は、あまりにも残酷です。しかし、それをまさに行なわれたのが神です。神の愛する独り子を、キリストを拒み、罵り、あざけているこの者のために、死に渡されました。ここに愛があるのです。

ここに書いてあります。この愛はこの世にはありません。見たこともないです、聞いたこともないでしょう、心に浮かぶような代物ではありません。ここにあるように、聖霊によらなければこの愛は注がれません。神の聖い霊によってのみ、キリストの愛を知ることができます。この世にはないのです。ですから、どうか今、そのまま信じて受け入れてください。神は愛しておられます。この愛は、私たちの思いをはるかに超えています。自分で変えようとしても、変えられません。変わらない、罪深いままのあなたのために、その負い目をイエス様が代わりに受けてくださいました。その愛を受け入れる時に、自分は自ずと変わります。目で見たことのないこと、心で浮かんだことのないことを、神はご自身を愛する者のために用意してくださいました。